

島野物語  
ロバート エイトケン

最近、ヴィレッジ ヴォイス (出版物：村民の声) は、エキスポゼイ (仏語：醜聞暴露) で、ニューヨーク禅堂 禅スタデイ ソサイエテイ 正法寺と、キャッツキル 大菩薩禅堂の住持であり、師家でもある島野タイ栄道の不行跡を公表する記事を出版しました。この記事は、彼の病的行為を詳細に述べており、説得力があります。 ややためらった後、私はアメリカの禅仏教徒の伝統を重んずる一人として、エキスポゼイにたいする反応を示す事は、多くの問題を提起するであろう事を予測し、大切な事であると思い至りました。

--- R. A.

アンと私は、1957年、龍沢寺で島野タイ栄道に会いました。この寺は私が以前修行した寺で、日本の三島にあります。彼はこの寺で五年間僧として住んでいました。彼はアメリカへ渡りたいから援助して欲しいと、私に依頼しました。私達は彼が私達の師、中川宗淵老師の気に入りの弟子であるように見えたので、もし、私達がハワイに禅グループを組織して彼を首座に置けば中川老師は、定期的に私達の寺を尋ねてくれるであろうと思いました。私達は島野を礼儀正しい、正直な若者であると信じ込み、彼の素性は調べませんでした。

今でも、私は、島野がどのようにして仏道に入ったか知りません。只彼は、世襲の僧ではなく、東京の近くにある寺で修行を始め、そこで中川老師と巡り会ったと語りました。ある時、禅教師の集会有って、島野は師達の食事の世話をする侍者を勤め、中川老師の侍者に対して頭を下げ感謝する態度に感銘を受け、この時、中川老師を自分の師と決めたそうです。

島野の龍沢寺時代の事は推量しか出来ません。多分彼は目的を達するため献身的な態度を示したものであると思います。彼の陰性の性格は、後日明らかになるのですが、この時はまだ初期の段階でした。寺に女は存在せず、彼は毎日、規則的な僧堂生活に精力を注いでいたと思われます。後で知った事ですが、龍沢寺内で彼は、他の僧達に対して非常に傲慢であったため、嫌われ者でした。

1960年、島野がハワイへ来た頃、禅の集会は週に二度、私達の自宅で行われていました。私達は本屋を売り、まだハワイ大学での職は始まっておりませんでした。彼は私達と同居し、彼と私は共に禅のテキストを翻訳して、禅グループのために教材の準備をしました。

すぐに問題が生じ始めました。彼がグループの中に友人を作り始めると、人間関係における典型的な彼の性情が現れ始めました。今、振り返ってみると、私はこの問題を適切に処理しなかったと思いがたのですが、黙っているべき事を説得しようとしたり、はっきりさせるべき事を、黙って耐えたりしました。私は坐禅による効果を信じ、師の、この問題は大事ではないという説得を信じたのです。

間もなく、僧たる者の身上として、貧困を受け入れるという私の先入見は、島野には該当しない事が分かりました。私達の最初の師、ロスアンジェルス千崎如幻先生や、彼の同僚である、龍沢寺の福井どうかい和尚、彼は1960年代、オハイオ州のイエロウスプリングに住んでいましたが、彼らと違って、私達の新しい僧は、敬虔さ、慎み深さというものが全くありません。ハワイ大学の半日コースを受講することになり、距離として徒歩10分、バスで2区間あったのですが、彼はオートバイを要求し、給料の増額を要求し、街の若者と変わらぬ服装で通学が始まりました。彼は29歳でした。

1961年秋、アンと私が龍沢寺を訪れた時、一枚の僧伽メンバーの写真を、中川老師にお見せしたのですが、中川老師は島野を指して “これは誰だ” と尋ねました。 “タイさん” と、私は日常呼びな

れている彼の名を告げると、中川老師は吃驚して、“これがタイさん？”と叫びました。写真をもう一度見直してみると、なるほど、この15ヶ月の間に彼は驚くべき変貌を見せていました。

世襲の禅僧は、禅寺での修行が終わると、特に寺に残りたいと言う希望が無い限り、転移があります。通常、生家の寺に帰り、副住職の地位に就くか、住職であった父親が退職するか死んだ場合、住職の地位に就きます。単調な禅寺での生活の後、この転移は複雑なのですが、殆どの場合、このような順序規定は問題なく運ばれます。

島野の場合、新しい文明に対するショックと、彼の持って生まれた性格のため、伝統的な禅寺での修行生活からの転換は、暴風雨に打たれたようなものだったと思われます。私達が観察した所、彼は少し遅れて思春期を体験しているかのように見えました。時には、彼の判断があまりに幼稚であるため、単なる未熟という言葉で説明がつくものであろうかと私達は訝るのでした。

1964年の春、私達の集会の常連の女性二人が神経衰弱の発作を起こし、入院を余儀なくされました。この内一人の発作は集会の最中に起こり、彼女はヒステリックな狂乱状態を示したのですが、発作の直前に彼女が叫んだ不思議な言葉の内容、行動を思い返してみても、彼女の神経衰弱の原因がここにあるように思われ、私は治療に関する責任を感じたのです。

私は精神科医に精神医学を学びたいと相談しました。彼は私にボランティアとして市営病院の精神科病棟へ来るよう勧めました。彼はここで医学実習生を訓練する主任をしていました。私は週二回、患者を尋ね、集会に参加し、時々医師に質問しました。島野が発作の一件に関心を持っている様子だったので、このボランティアの仕事に島野を同行したいと申し出たところ承諾を得、私達は患者と将棋をさしたり、ヴァレーボールに興ずるという新しい日課が始まりました。私は従業員会議に何回か参加したのですが、島野は英語の応答が早すぎて、ついていけないという理由で、参加しませんでした。

しかし間もなく、私の友達の精神科医より、彼の病棟の社会奉仕員の、二人の女性患者に関する報告書の中に島野の名が浮き彫りになったという驚くべき情報を知らされたのです。そして島野がボランティアとして病棟へ出入りする目的は精神的に不安定な女性患者を餌食にするためであるという結論を知らされました。私は非常に驚き、二人の女性の神経衰弱の原因に、まさか島野が関係しているとは信じられませんでした。二人の女性患者の内一人を治療した精神科医の慎重な説明を聞いて、私が間違っていた事を悟りました。私はもう一人の患者を治療した精神科医に手紙を書きました。この医師は、病院の実習生だったので、彼の住所を探すのに時間がかかり、実際に島野が彼の患者の神経衰弱の原因であるという実証は、私の善処の行動には間に合いませんでした。

私はこの一切の情報を島野に示して、対決する事は出来ないと感じました。私達の関係は非常に悪く、互いの信頼というものが全くなく、多分彼はすべてを否定するであろうし、二人の被害者への影響を思うと、公表し島野の不行跡を暴露することもためらわれます。島野との公然の闘争は、グループ内の分裂も予想され、取り返しのつかない結果を招く危険もあります。という訳で、私は師の中川老師と相談するため日本へ行きました。

島野がハワイへ来て間もなく、中川老師の師と母堂が亡くなられ、彼は渡米計画をしばらく延期しました。彼は島野教育と、アメリカ在住の他の弟子達の教育を、古い友達、安谷白雲老師に委ねました。アンと私は、1957年、安谷老師の隠居所で教えを受けた事があります。1964年迄の間に、安谷老師は、ホノルル、ロスアンジェルス、ニューヨークと、三度アメリカを訪れています。

このような事情で、私は島野に関する問題を中川老師と相談するために日本を訪れ、中川老師は私を安谷老師のもとへ同道し、三人で話し合いました。正直に言ってこの二人の師の反応は、失望したとしか言いようがありません。私は英語と片言の日本語で中川老師に報告し、中川老師は全く英語を話さない安谷老師に通訳するといった順序でした。彼らの態度は、島野は無責任である、我々は島野に

対して行儀良く振る舞うように勧告すべきである、という程度のもので、私は二人の師に、私達はある種の精神異常者に対決しているのであるという、私が新しく得た実証を納得させることは出来ませんでした。

同じ家に住み、日に二度の食事を共にし、ベストを尽くして共に翻訳をし、僧伽の雑務を片付けるという、島野との共同生活四年の末、やっと分かった事は、この苦しみは、単なる個人的感情によるものではなく、ともかく並の人間が、全く別の次元に住む者と対決しなければならなかった衝突であったと気付きました。私達の日本の師達が、彼の弟子が性格的に決定的な欠陥の持ち主であったという、私の報告を受け入れる事が出来ない事も実は理解出来ない事ではないのです。彼らは島野に対する責任を十分に感じておりながら、彼を日本に呼び戻すという不名誉を彼に与える心の準備が出来ていないでしょう。

島野や彼の師達を批評する場合、精神病や異常性格に関する日本人の寛容さを理解する必要があります。例えばアルコール中毒患者をみた場合、“酒の好きな人”と言い、この、人を批判しないと言う態度には、本人が改めようとすれば何時でも改めるであろうと言う余裕を人に期待しているのです。分裂症や精神異常者に対するような扱いは不要なのです。ただし、改めようと言う考えがなく、自ら改める事の出来ない人間の場合は社会の制御が乱れます。

更に日本人達はアメリカ人を理解する規準に離婚率の高さや、映画による場合が多い事も知っておくべきです。島野が後に、セックス過剰のアメリカ女性によって難を被り、自ら被害者と名乗り、彼の師達には、これがアメリカ文明であると説得すれば師もそのように解釈したであろうし、これが師の知識の乏しさの原因だと私は思います。

ハワイへ帰り、私は島野が私の日本旅行、つまり彼の師に秘密を漏らした事を感じているようでした。彼は一切を拒否し、その上、もはやハワイには居れないと宣言、殆ど直ちにニューヨークへ発つと言い、その時にはすでに安谷老師の通訳を勤める契約も決めてありました。

その後の経緯は、又聞きです。アンと私は二人の被害者を守るために、沈黙を続けました。その内の一人は、約五年間、精神病院と私の家とを行き来しながら暮らしていました。多分、島野はハワイを発つことになった経緯や、私について、彼自身の物語で説明したであろうと思いましたが、私は構わず禅スタディ ソサイエティの友人に、要点を書いて手紙を送りました。彼の返答によれば、島野は近日中に結婚する予定であり、これで彼も落ち着くであろうと言うことでした。私はこれ以上、まだ会った事も無いソサイエティの人々に、説得を続ける事はできないと感じました。

とにかく、時は過ぎ、私達のグループは栄え、安谷老師の嗣法の山田こうん老師が私達の修行を助けることになりました。1974年、私は山田老師より嗣法を授かりました。

その間、島野は安谷老師より教えを受け、1969年、正式に終了し、中川老師のもとへ帰り、中川老師は彼に嗣法を授けました。ここに非常に大切な問題が生じます。1976年の彼の講話、次いで随筆などを読んで、彼の洞察力の拙劣さがあまりに明瞭であることに驚いたのですが、二人の師にはこの点が見えないのでしょうか？

私が思うに、この二人の師は島野を見て彼は今まさに変化を遂げようという状態にあり、今後も引き続き進歩を続けるであろうと自ら納得したのでしょうか。彼はニューヨークで順調に地位を築き、多くの優れた弟子達を魅惑しました。

今でこそ、後知恵として分かるのですが、禅仏教史上多くの禅師達は、力を尽くして弟子を養育したにもかかわらず、嗣法に値する僧に育たず、伝法することなしに死んで行った。この分別に気付き適用する事が賢明だと思います。

今日でも、禪の修行は激しく、過酷です。すべての行為は式典に基き、教えとして使用され、貴重なものとして僧を導きます。坐禪の修行を通して平和、調和、共存へと開かれて行くのです。仏教の“十戒”は、黙想における首題として考察され、”六波羅蜜”も同様です。禪堂では、日常、慈悲が知恵の侍女的存在として、講話、面談等で強調されています。坐禪を通して得る比較的僅かな自覚によってさえ、勤勉に僧堂生活を続けるならば、彼は八年程で模範的な人物になります。たとえ怠惰な僧であっても、この修行の過程を経るならば、より好ましい人間になれるのです。

正しい禪の修行により、人は深淵な自覚を明確にし、毎日の勤めを通して得られる、生きとし生けるもの救済の思いは、生涯の仕事となるのです。真に完成された仏弟子は、必然的に、広々とした心と愛情に満ち、当然子供や動物の好きなやさしい人間です。もしこのように容易に、慈愛の境地に至る事が全人類の宿命ならば、禪堂はそれほど厳しい所ではない筈です。

明らかに島野は別個の品種です。彼は禪堂で十分に訓練を受けた禅僧かもしれませんが、外殻を磨いただけのようなのです。一部の人は彼を一見しただけで、即座にこの形骸の内部に心の不在を見抜きます。千崎先生の最晩年、中川老師は、島野をロスアンジェルスに千崎先生のもとへ送ろうと試みたのですが、千崎先生は信頼出来る友人を、龍沢寺へ送り、島野と面会させました。彼女は島野を一見しただけで、“貴方には向かない人”と千崎先生に報告しました。

同様に、島野の昔の弟子がある時、弟を伴って、禅スタデイ ソサイエティの集会に出席しました。彼の弟は最初の休憩で去りました。なぜ去るのかと尋ねると、弟は“あれは芝居だ”と答えたそうです。

しかし、中川老師は慈愛をこめて島野の成長に期待をかけ、不思議な文明のなかで生きる者が、時折経験しなければならぬ一種の障壁とでも、寛容に解釈していたのでしょうか。島野の弟子達は、禅師と自称、宣言した人物に多大な期待を抱いており、さらに、彼らはアメリカ人の理想に幻滅を抱いていたので、東洋の文明に感動すべき要素を求めていたのです。このような状況下において、真似事の禅仏教とその伝統は、エキスポゼイにおいて明白に暴露され、蕾が開き、傷が膿だしたのです。

島野の人を巧妙に操縦する手腕は、セックス操縦を含めて、著しく苦痛にみちた背信でした。仏道を学ぶ弟子達は、他の宗教においてもそうなのですが、無我の境を学びます。無我の生命を自覚した最初の頃は、彼らは古い形骸を除き、普遍的な権化の自信を得る迄、時として不安が生じます。この不確かな思いこそ、島野が弟子の弱みにつけ込む隙になるのです。一部の弟子達は完全に精神衰弱に落ちるのですが、驚くべき事ではなく、むしろ、十分納得の行くことなのです。彼の弟子達は定期的に集まって、共に坐禅し、経験のある人物を集会に加えて、徐々に回復を計ってほしいと思います。

私は今、島野が何をしようとしているか気にかかります。私の推量では、彼は自分の地位をしっかりと守り、エキスポゼイで、すべての事実を目前に並べられても、完全に拒否するでしょう。ごく少数の彼を信頼する弟子を納得させ得る限り、多分彼は教え続ける希望でしょう。

それはなりません。私の見た所、状況を判断して、禅スタデイ ソサイエティの指導者級の人は、島野に、良い治療者の援助を得て、彼自身を正すよう確固として勧めなければなりません。もしそれを拒絶するならば、しかるべき訴訟処置を行い、教師の地位から除くことです。

私達西洋の禅仏教徒センターは、エキスポゼイの出版により影響を受けます。これは苦い薬ですが、飲み込まなければなりません。私達はこれによって健康を取り戻し、偶像崇拜ではなくなり、私達自身に、友人に、社会に、より責任を持つことになるのです。